

都市在住高齢者の出身農山漁村観について

乗 本 秀 樹

On the Attitudes of the Urban Aged toward their Home Rural Areas

Hideki NORIMOTO

1. 課題

i) 生まれ育った農山漁村や人生の一時期を濃密に体験した地域を離れて、都市に暮らし続ける。そして、いま高齢期を迎えつつある。——彼らは、かつて後にした所をどのように思い感じているのだろうか。このことについて知る必要が生じているのではないか¹⁾。

たとえば、多くの農山漁村で村おこしや町づくりが課題となっており、しばしば「都市民との交流」が掲げられる。農畜林産物や海産物、農山漁村の自然、伝統芸能や名所旧跡が資源として活用されながら、都市民の来訪が促されるのである。

おそらく、このような対応は有意義であるし欠かせない。だが、都市民を快適や安全や差異化を求める消費者とみなす経済的交流だけで、はたして十分なのだろうか。そのことによって、かえって農山漁村振興メニューの幅を狭めているのではないだろうか。農山漁村の活力低下が端的には「農山漁村に人がいなくなった」ことであることを思えば、別の見方もあってよいのではないか。

その一つとして重要だと思われるのは、都市民をたんなる消費者とみてしまうのではなく、人間あるいは生活者として理解することである。たとえば、「職業生活や消費生活の便利さと快適さのただ中にいる人たちであるとともに、さまざまなジレンマやアンビバレンスを抱えもつ人たちである」というように両義的に都市民を理解し気遣うとき、「癒し」や「福祉」や「対話」などの新しい農山漁村振興のキーワードが浮かび上がる。それとともに、イベントの派手さや短期的射程での経済効率には欠けるかもしれないが、「人の増加」に結びつくであろう諸方策が構想されるのではないだろうか。

このような見方が、はたして地域を運営する人々に受け入れられるかどうか。それに先立って、農山漁村に生き暮らす人々において、都市民に対する開かれたまなざしが形成されているのかどうか。逆に、都市に生き暮らす人々において、農山漁村とそこに生き暮らす人々に対して率直で開かれたまなざしが形成されているのかどうか。こうした点が大いに気になる。

農山村に生き暮らす人々がたんなる農林業労働力ではないこと。農林業などに従事し続けるなかで生を実現したり自然や他者との関係についての見方・感じ方を紡ぎ醸成すること。このことを、筆者は長年農山村に生き暮らしてきた高齢者たちに垣間見た。それによると、彼らは、我が家や我が村に偏執しないし、自分の人生をかけがえのないものと思いつつ村外や都市民とのコミュニケーションを意義あるものと考えたり、間近に交流することを願っている²⁾。

これに対して、都市在住の高齢者たちは農山漁村に対してどのような考え方や感じ方をするのだろうか。本稿では、この点について、出身地の農山漁村に対する感じ方や考え方に限りながらみておこう。

ii) 「出身の農山漁村に対する感じ方や考え方」を問うことは、農山漁村一般に対する姿勢を尋ねることと同じではない。また、特定の農山村の人々が都市民一般をどうみるかという先の調査事例の問題設定と対をなさない。こうした意味で不十分ではあるが、都市民ないし都市在住高齢者の農山漁村観を見るための予備的考察としては有意義であろう。

また、「出身の農山漁村に対する感じ方や考え方」やふるさと観をみることには、特有の困難が伴う。

すなわち、ふるさと観ないし出身農山漁村観のありようは、各人の年齢、性別、歩んできたライフコース、現在地での居住歴、配偶者の有無や配偶者の出身地、郷里が山間・海辺地か都市近郊か、親や兄弟姉妹が健在かどうか、といった諸要因に影響されよう。また、ふるさとでの体験が幸福なものだったかそうでなかったかというちがいが大きい³⁾。さらに言えば、現在の生活が順調であるかどうかによって、ふるさとへの感慨も異なってくるのではないか。そうだとすれば、同一人においてさえふるさと観は一定しない。いわんや複数人のふるさと観について明確な傾向を導き出そうとすることは不可能に近く、無謀でさえある。

その意味で、なによりも大切なのは、高齢者の数だけ多様な考え方や感じ方を、それぞれに重みあるものとして丁寧に描きとることである。それにもかかわらず、ここではあえてアンケート調査を試みようとするのだが、それはいまだ研究が着手されていないと思われるこの主題に第一次的に接近しておこうとしてのことである。

2. 都市在住高齢者の農山漁村観・ふるさと観

(1) 調査の方法

これまでの人生、郷里との交流の様子、郷里の農山漁村振興への所感などについて尋ねる調査票（「都市在住高齢者の方々の農山漁村観・ふるさと

観に関するアンケートJ」）を作成した。そして、都市在住の高齢者に郵送し、原則として無記名で回答し返送してもらうことにした⁴⁾。

調査対象は、1945年から1957年の間に三重大学教育学部を卒業し、現在東京近郊（JR 東京駅から1時間以内の交通距離）に居住している人々の全員であり、その数は101人である⁵⁾。調査票の配布と回収は、1999年11月から12月上旬にかけて行った。

回収状況については、転居先不明等で調査票が配達されなかった者25人、配達されたが無返送の者26人で、回収された調査票は50人分であった。そして、後者のうちに回答辞退者が1名あったので、実質の回収は49人、配達された76人に対する割合は64%であった。

以下には、単純集計の結果をかんたんに紹介する。精確な分析を施したり詳細なコメントを付さないのは、サンプルが少数であること、先に述べたように傾向的把握の方法が必ずしも適切でないこと、ならびに既存研究の状況からみて概略の紹介であっても斬新さがあると判断されることによる⁶⁾。

(2) 回答者の属性

回答者49人の性別、年齢別、ならびに同居家族員数別のうちわけは表1のとおりである。回答者の多くは、いわゆる昭和1ケタ世代である。

東京近郊での居住歴ならびに東京近郊以外の地

表1 性別・年齢別・家族員数別のうちわけ

	年 齢			家族員数（本人も含む）				計
	63-65歳	66-70歳	71-75歳	1人	2人	3-4人	5人以上	
男	4	9	7	—	11	7	2	20
女	2	16	11	3	13	10	3	29
〈計〉	〈6〉	〈25〉	〈18〉	〈3〉	〈24〉	〈17〉	〈5〉	〈49〉

（注）単位は人。

表2 東京近郊在住期間別・他地域居住回数別のうちわけ

東京近郊 在住期間	10 年以下		11－20 年		21－30 年		31－40 年		41 年以上		無回答		計					
	2		3		6		9		28		1		49					
他 地 域 居住回数	0 回		1 回		2 回		3 回		4 回		5－9 回		10 回以上		無回答		計	
	15		6		8		4		1		－		1		14		49	

（注）単位は人。

都市在住高齢者の出身農山漁村観について

表3 郷里について思い出されること

1	わらびがり、野あかりだんご、苺狩り、たにし取り、つつじの頃の赤い山、笹百合の山、秋の七草つみ、秋の村祭り、祖母との会話と死、父から蕎麦そうり・ふこ作り、講詣り、貝とりという魚釣り。	26	伊勢の海、白い砂浜、どこまで行っても遠浅の青いすきとおる海。緑の松風、風のざわめき、磯の匂い。山、経ヶ峰、長谷山、よく登った布引山、[郷里に帰る電車の窓からこれらの山々が目に入ってくると何故か涙がこぼれる]。川、雲出川、又その支流で泳ぎよく遊んだ。菜の花畑、レンゲ畑、つくしつみ、観音様の会式のにぎわい、秋の祭り、おみこしなど数限りない。
2	わらび採り、苺掘り、杉苗植え、餅つき、あられ切り、柿の皮むき、干柿作り、綿入れ着物、雪。	27	とんぼとりやどじょうすくい、岩田川での釣り。海岸。経ヶ峰と長谷山がいつも美しく、夕日もよかった。
3	汽車がトンネルを出て篠田川の鉄橋を渡り駅に止まる風景。東京から行って空気がおいしかったこと。田圃の上に雲の影が動くのを見たこと。れんげと菜の花の景色が美しかった。夏の今一色の海岸の宝探し、桜貝がいっぱいあったこと。	28	田んぼの中の湧き池や小川でザリガニ、メダカを追ったこと。メダカの学校は大きな二つの輪、忘れられない。氏神様の秋祭り、夜おそくまであそんだこと。
4	小学校・女学校・師範学校の学生時代の色々なこと。家庭内、その頃の社会の様子[衣食住を現在と較べての違い]。町、津のまわりの山、川など豊かな自然。	29	両親につれてもらった二見浦の海水浴、宮川堤のお花見、近くの川での潮干狩。友達とのれんげ畑でのかけっこ、メダカとり、たにしとり、竹馬。近所の家での縄ない、ぞうり作り、海苔作りの体験。家の前の広場でお祭りの時の狂言の舞台や夜店のにぎわい。田んぼの向うの空いっぱいのもったかな夕焼け。出征兵士の見送りや千人針作り。
5	小学生時代、前は海、後は山で思いっきり遊んだ。楽しい忙しい毎日。すばらしかった海と島の風景。お世話になり面倒をみてくれた今は亡き祖母のこと。	30	本多城址周辺で幼少期を過ごした日々の思い出。
6	田植、松茸狩、野球の試合・練習。	31	自然。
7	大学生の頃、我が家の山小屋で海水から塩を焼いた。雄木をたき、ブローカーに売って学資。川や海で小学生～師範学校時代よく泳いだ[今は汚れて泳げない]。	32	小中高校の通学路。道路に沿った小川。
8	田の仕事、山の仕事をしたこと。青年団長として活動したこと。	33	関西線の亀山から伊賀上野までの山なみ、田園風景。伊賀上野駅から見える白鳳城、盆地の山なみ、伊賀弁による会話、中学・高校時代の通学路の古い町なみ。
9	近くを流れる三滝川の川原であった花火大会。東南海地震・動員・空襲[恐しく思い出すが、今になるとつかしい思い出]。	34	野山で楽しく遊んだこと。
10	子供の頃よく海水浴をした砂浜[今は火力発電所]。遠足等で山深い谷川等へ行った所、尾鷲町のヤーヤ祭。	35	松茸がはえる小高い土地が庭だった。池があり、緑があり、静かでやさしい人柄の処だった。40分も歩いて学校に通った。へびやいたちやかえるに会った。かえるの合唱はなつかしい。田んぼの間をたにしやざりがにをとりに歩いた。教師になって山や川や美しい自然の中で生徒と共に過ごした間は、思い出してもなつかしい。
11	津観音境内に祭り、見せ物小屋や店がよく出た。歌舞伎を上演する劇場、華やかでにぎやか。遠浅の海水浴場。水泳などの遊び。空襲の中母と逃げた。防空壕生活。	36	きれいな川のせせらぎでメダカ、他の魚を追いかけた。野山をかけめぐって動植物の生態を知った。11月半ばを過ぎると藤原ヶ岳に雪が積もり、人々がその年の寒暖について噂した。小さな村だから人々、家の様子がよくわかり、人間交流がよくできていた。
12	幼な友達、盆踊り大会、村祭、各同窓会。	37	桑名の名取祭り、正月の多度神社初詣。
13	伊勢平野の景観(経ヶ峰、長谷山、堀坂山、八頭山、菜の花・麦畑、蓮華畑等)、遊びの場となった寺の境内、雲出川の流れ。	38	津のまつり、津海岸(海浜学校)、長谷山の遠足(小学校時代)。
14	山はあお静かで水は清く鮎が走っていたり、春は山ツツジの中でわらび採り、夏はかわずの鳴く田で蛸採り、秋には満ちの落ちる谷間でシノミ拾い、冬は火鉢のそばで本を読んでもらった。広い緑側でアナサマ入形、庭にムシを敷いてママゴト等の遊びの楽しさ。	39	〈金閣寺の近くだったので、左大文字の山に登ったり、洛北の山で遊んだ〉
15	つくし摘、れんげそう摘、潮干狩、夏祭、盆踊、渡し舟、夏休みラジオ体操。	40	川遊び(釣りなど)。
16	陸軍の演習時の兵隊の宿、陸軍病院の慰問など。津まつり、国魂神社祭(しゃごん馬が出て祭をもちあげた)。師範時代、勤労奉仕、農業の作業など先生達と一緒に働いた。	41	雲出川の上流や近くの山で、お寺・神社で、れんげ草畑で、主に友達と遊んだこと。
17	小学校低学年の頃、雲出川のしんゆうという最も深い所で筏からとび込んで溺れ、あゝ死ぬとはこういうことか…と、黒い影がすつとのびて来て、それにつかまり助けられた。	42	田畑を耕したこと、川遊びをしたこと。
18	川遊び、野原で摘んだ草でままごと遊び、古い街並みがあるところ。	43	山道を自転車こいで通学したこと。学校が遠いので、受験のため半年ぐらい友達と町で自炊をしたこと。
19	津の海、伊勢湾を思い出す、白砂。西にある山々、母校の思い出。	44	ヤーヤ祭り、海水浴場[山をくずして埋め立てられてしまった]、港祭り(花火大会)。
20	阿漕浦に近く海辺で遊んだ事、初日を拝みにいった事、丸山神社のおまつり。岩田川が氾濫すると床下浸水し、困った事。	45	土地、風景。[帰郷の機会もあり、懐かしいと特に思うことはない]。
21	祇園さん、初午、ひなわぐりなどの伝統行事。阿漕浦や賢崎のすばらしい白砂の遠浅海岸での海水浴。幼稚園での大根ほりや遠足等の行事、友達との行き来。〈毎夏行って半月ほど滞在した郊外の温泉宿(現白布温泉)での生活。旧城下町の蔵〉。	46	〈戦災で消失した町だが幼き頃通った道がある。京浜急行(父も勤務していた)の電車に乗ると駅名など懐しい。蒲田、川崎など工具さんの町。飾りのない町が思い出される。〉
22	終戦の玉音放送。夏場の川遊び、川魚捕り、冬場の薪集め(家事手伝い)。	47	物心ついた時から戦争ばかりで、あまり楽しい事はなかった。母や近所の人々と山菜やきのこ狩りに行った事。伊勢の海で海水浴をした事、広い松林と美しい海、波の音と松林を渡ってくる風の音。氏神様の夏祭り、大晦日のドンド焼き。
23	小学生時代、鱒大敷網で沢山の鱒がとれ海岸の道に山積みされた風景。戦争中、魚がいくらでも食べられたので満足していたこと。旧正月のお祭り、鱒の大漁を呼び寄せる祭り。	48	仲良しの友と野山で遊んだ事。鈴鹿の山まで田畑がひろがってのんびりとした風景だったし、四季が感じられた。山なみまで続く菜の花畑の美しさは、むせかえる様な花の香りと共に今もはつきり思い出す。
24	宮川とその支流で泳いだこと。つり橋とその下に見えたつらら。		友達と魚とりに明け暮れた小川。家の手伝いで、田の稲刈、脱穀、田植のきびしい農作業。テニス、野球に楽しんだ母校(小学校校庭)。
25	津市内が戦災ですっかり焼けた当時の恐しさ[今となっては懐かしい思い出]。		

(注) ①48人の記述を、なるべく原文のまま示している。

②[]は現在についての記述であることを、〈 〉は三重県外の郷里についての記述であることを表す。

域での居住経験を、表2に示している。これによると、多くが卒業後の人生の大半を東京近郊で過ごしている。その一方で、少数ではあるが、近年に東京近郊に居住しはじめた者もいる。また、他地域での居住経験は多様である。なお、他地域居住経験についての回答は無回答、「0回」、経験ありに3分される。無回答や「0回」が多いのは、「転勤等によって他地域に居住したことがある方は…」という設問文によるのではないか、あるいは教員という職業に従事した者が多いためではないか、と思われる。

大学卒業後の職業経験は、男性については、

- ・ずっと教員（教育委員会勤務や管理職も含む）…………… 11人
- ・教員ののちに会社員（製薬、新聞、貿易、金属加工）…………… 5人
- ・教員・会社員ののちに再び教員…………… 1人
- ・ずっと会社員（貿易、証券、出版）… 3人

である。女性については、

- ・ずっと教員…………… 18人
- ・教員ののちに学校外教師（絵画教室、音楽教室、学習塾）…………… 3人
- ・教員ののちに会社員…………… 2人
- ・会社員ののちに教員…………… 1人
- ・ずっと会社員…………… 1人
- ・学校外教師ののちに公的機関勤務…………… 1人
- ・教員・主婦ののちに再び教員…………… 1人
- ・教員を続けながら作家活動…………… 1人
- ・ずっと主婦…………… 1人

である。女性の方が職業経験パターンが多様であるが、彼女らのうちに三重県と東京都の両者で教員を勤めた者が4人いることを考え合わせると、女性の職業経歴はより複雑である。

さて、回答者たちは、次の地域を郷里としてあげる。

- ・三重県内都市…………… 48人
- ・山形県内市…………… 1人
- ・東京都区…………… 1人
- ・京都府内市（京都市）…………… 1人

ただし、2人が、郷里として複数地域をあげる。うち1人は三重県内の2郡市を、他の1人は三重県内市と山形県内市をあげる。

その郷里のかつての様子は、農山村9、商業地8、都市近郊農村8、住宅地7、純農村6、山村4、農漁村3、ならびに漁村、山漁村、商工漁業地域、漁林農商業地域各1である（東京都区と京都市を

除く）⁷⁾。そして、これらの郷里に誕生時から育ったと思われる者は31人である。これに対して、10歳前後から住み始めた者が約10人おり、そのきっかけの多くは疎開や引き揚げのようである。

彼らの心に残る体験や光景を描いてもらうと、表3のようである。体験や光景の断面、筆致や抽象度においてさまざまであるが、海・山・川などの自然的なもの、水辺などでの遊びや伝統的な行事に関するものが多くを占めている。

また、彼らに、筆者が表現するいくつかの「ふるさと」定義のうちから同感できそうなものを選んでもらうと、表4のようである⁸⁾。これによると、父母などの近親者に因むことがらと夢中の体験とがふるさとであることの二大要因のようである。なお、風景が似ていたり心が安らぐだけではふるさとにならないこと、少数者によってではあるが「目的をもって生きている、今このとき」という一見逆説的な定義が受け入れられていることは、示唆的である。

表4 ふるさとの定義

	男	女	計
父母兄弟と過した所。今はなく、追憶だけ。	3	8	11
父母兄弟と過した所。そこに立てば感慨が蘇る。	15	23	38
父母兄弟と過した所に似ていけば、他地域でも。	0	0	0
夢中で過した所。もう帰ってこない。	6	9	15
夢中で過した所。そこに立てば感慨が蘇る。	13	23	36
家族たちと穏やかに暮らしている、今・ここ。	4	3	7
意思疎通やネットワークができてこの地域。	2	8	10
心がやすらげば、どこでもふるさと。	1	1	2
目的をもって生きている、今このとき。	1	4	5
その他。	1	0	1
〈計〉	〈46〉	〈79〉	〈125〉

(注) ①複数回答、単位は人。

②全員(男性20人、女性29人)について。実回答者数も同数。

(3) 現在の活動

仕事従事の現況は、男性では従事している者8人、従事していない者12人、女性ではそれぞれ2人、27人である。仕事の内容は、男性の場合、会社監査役、教育史編纂講師、薬局経営、不動産賃貸、出版社雑誌校閲、社会保険労務士事務所経営、会社役員、区児童生徒日本語教室講師などである。女性の場合は、商品仕入・在庫管理、専門学校講師・著述業などである。

仕事以外の活動の状況を表5に示している。男女ともに約7割が回答しており、女性の活動とく

都市在住高齢者の出身農山漁村観について

表5 仕事以外の活動

[男性]	
①趣味として絵画クラブ、ゴルフクラブ。	⑤趣味の会。老人会役員。
②市古文書研究会に所属。	⑥NHK 通信教育、市の成人教育で書を学習。カルチャーで源氏物語を受講。
③全国退職校長会生涯学習推進委員、退職公務員連盟市副支部長、市老人連合会理事スポーツ委員長。	⑦趣味の会。
④東京都退職校長会写真クラブ。篆刻・ゴルフ。	⑧日本和紙絵画芸術協会会員(上野美術館に出展、受賞)。
⑤囲碁。	⑨自治会老人コーラスの指導。フランス語の勉強、カンツォーネの勉強(年1回発表会)。
⑥私小説的な作品執筆。新聞社校閲部OB会世話人代表。	⑩視覚障害者への朗読奉仕。フォークダンスなど。地域の歩こう会。
⑦囲碁・ゴルフ。	⑪ボランティア。絵手紙サークル。
⑧海外旅行(年平均3回)。	⑫知的障害者の社会復帰準備に関する介助ボランティア。W大エクステンションセンター社会人学級。
⑨囲碁の会。	⑬NHK コーラス。
⑩写真の会(撮影会)、囲碁(碁会所)。	⑭地域のボランティア。町会の仕事。短歌の会、ダンス、テニス等。
⑪カルチャー。	⑮民生委員、児童委員、地域小学校交流会委員、更生保護婦人会、町会幹事。
⑫趣味の会。	⑯レザークラフト(月3回)、フォークダンス(月3回)
⑬自治会組長。	⑰趣味で踊り。
⑭町会役員。	⑱ボランティア活動(ことぶき会)。趣味の会(茶の湯)
[女性]	
①環境問題に関するボランティア活動。俳句、書等。	⑲町内会役員、連合町内会の部代表。カラオケ練習(月1〜2回、夫を含む10人程、地区センター)。
②趣味(俳句)。	⑳水墨画(ボザール会員)、書道(かな)、お茶、俳句。町民文化会役員・会計。文化祭の看板、舞台プログラム、名札書き。
③俳句の会。NHK 教室受講、俳誌投句毎日文化センター・エッセイ受講、源氏万葉受講、老人大学(自強術、英会話)、スイミングスクール。	㉑市明るい選挙推進協議会委員。
④児童館の学童に絵を指導。	

表6 暮らしの中の農山漁村的なこと

	男	女	計
周囲が田園地帯なので満足している。	7	4	11
市民農園に参加して作物を作っている。	0	2	2
自家菜園をしている。	2	7	9
プランターや鉢に花や野菜を育てている。	13	20	33
漬物などを自分で作っている。	2	12	14
郷土の料理を作っている。	4	7	11
おりにふれて、自然があるところへ出向く。	16	21	37
木工などの大工仕事をする。	4	2	6
その他。	5	6	11
〈計〉	〈53〉	〈81〉	〈134〉

(注) ①複数回答、単位は人。

②全員(男性20人、女性29人)について。実回答者数も同数。

に自己啓発的学習やボランティア活動の活発さが目立つ。

また、日常生活の中に農山漁村的なことがらがどのように取り込まれているかをみたのが、表6である⁹⁾。1人あたり2ないし3のことがらが取り込まれているようである。なお、同表には山村、漁村的なことがらについての選択肢が乏しい。そのために、「その他」において、「環境問題に関心を持ち、衣食住について自然のままのものを取り入れるようにしている」などととともに、「庭に

木・草を絶やさないようにしている」「庭木の手入れ」「さつき作り」「野鳥関係の諸事」「林に囲まれた遊歩道をときどき歩く」、あるいは「家族で度々釣りに」などが記述されている。

(4) 郷里との交流

都市に居ながら、郷里とどのようにコミュニケーションを保っているのか。この点について表7に示している。それによると、年賀状交換、冠婚葬祭への参列、テレビ画面(片方向ではあるが)などの方法に他の1、2の方法を組み合わせ、交流しているようである。「その他」は、「2〜3年に一度、帰る」「2年に一度の高校クラス会に出席」「墓参をかねて年1〜2回は訪ねる」「母が郷里で一人住まい。健康だが月一回一週間ほど滞在」「教え子や同期生の同窓会にときどき行く」「友人、親戚とときどき電話で話し合う」などである。なお、表7で「毎年、時期を決めて郷里で過す」「毎年、何回か郷里を訪問する」「郷里や郷里近くで祭りなどのイベントがあれば行く」と答えた者に対して、誰が交流しているかを尋ねると、表8のようである。

そのような交流状態を、彼らはどのように感じ

表7 郷里との交流の方法

	男	女	計
毎年、時期を決めて郷里で過ごす。	5	2	7
毎年、何回か郷里を訪問する。	7	11	18
郷里や郷里近くで祭りなどのイベントがあれば行く。	1	0	1
法事などの冠婚葬祭に行く。	14	19	33
郷里の親戚や友人が訪ねてきてくれる。	6	8	14
我が家の冠婚葬祭に郷里の親戚や友人がきてくれる。	10	10	20
郷里の友人や親戚と年賀状などを交換する。	18	25	43
郷里の食材を取り寄せて味わっている。	10	12	22
郷里の材木を使うなど、郷里の生活資源を活用している。	1	0	1
郷里の広報誌を取り寄せて読む。	1	3	4
テレビなどに郷里の光景やできごとが登場すると楽しむ。	13	22	35
同郷の出身者たちで集まりをもつ。	7	17	24
郷里とかかわりがない。	0	1	1
その他。	3	3	6
〈計〉	〈96〉	〈133〉	〈229〉

(注) ①複数回答、単位は人。

②東京都区、京都市以外を郷里とする47人について。実回答者数も同数。

表8 交流する人

	男	女	計
自分だけの交流。	2	4	6
自分たち夫婦だけの交流。	2	5	7
家族そろっての交流。	4	3	7
知り合いも引き連れての交流。	1	0	1
その他。	0	1	1
〈計〉	〈9〉	〈13〉	〈22〉

(注) ①複数回答、単位は人。

②表7で上3つの選択肢(「毎年、時期を決めて郷里で過ごす」「毎年、何回か郷里を訪問する」「イベントがあれば行く」)のいずれかに○をつけた男性9人、女性12人について。実回答者数は、男性9人、女性11人。

表9 交流の満足度

	男	女	計
満足している。	10	14	24
少し不満なので、もっと交流したい。	2	3	5
少し不満だが、どうしようもない。	3	4	7
大いに不満なので、もっと交流したい。	0	0	0
大いに不満だが、どうしようもない。	1	1	2
関心がない。	0	1	1
その他。	3	3	6
〈計〉	〈19〉	〈26〉	〈45〉

(注) ①択一回答、単位は人。

②東京都区、京都市以外を郷里とする47人について。実回答者数は男性19人、女性26人。

表10 交流を難しくしている要因

	男	女	計
毎日が忙しい。	1	13	14
行き来にお金がかかる。	13	10	23
行き来に体力を要する。	4	7	11
一人では移動できない。	0	0	0
郷里の人々の代が変わった。	3	6	9
郷里の風景が変わってしまった。	5	5	10
郷里での交通が不便。	5	4	9
郷里での宿泊施設がない。	2	1	3
とくにない。	4	0	4
その他。	1	3	4
〈計〉	〈38〉	〈49〉	〈87〉

(注) ①複数回答、単位は人。

②東京都区、京都市以外を郷里とする47人について。実回答者数は男性18人、女性25人。

表11 交流の永続性

	男	女	計
子や孫の代まで続いてほしい。続くだろう。	6	3	9
子や孫の代まで続いてほしいが、途絶えるだろう。	10	18	28
自分は交流していないが、子や孫は交流するだろう。	0	0	0
子や孫が郷里と交流することなど、考えもしない。	3	1	4
その他。	0	4	4
〈計〉	〈19〉	〈26〉	〈45〉

(注) ①択一回答、単位は人。

②東京都区、京都市以外を郷里とする47人について。実回答者数は男性19人、女性26人。

表12 思い入れをもつ他の農山漁村

	男	女	計
あ る。	13	13	26
な い。	7	16	23
〈計〉	〈20〉	〈29〉	〈49〉

(注) ①択一回答、単位は人。

②全員(49人)について。

表13 思い入れをもったきっかけ

	男	女	計
配偶者の郷里や親戚。	5	6	11
知人に紹介されて。	1	1	2
仕事で訪れたところ。	2	3	5
パンフレット、テレビなどで。	2	0	2
その他。	8	6	14
〈計〉	〈18〉	〈16〉	〈34〉

(注) ①複数回答、単位は人。

②表12で「ある」と答えた男性13人、女性13人について。実回答者数も同数。

ているのだろうか。これを尋ねたのが表9であり、満足できている者は約半数である。ただし、不満だからといって改善しようとする（できる）者は少数である⁸⁾。

その「満足」もスムーズに達成されているわけではなさそうである。郷里との交流を難しくしている要因がありはしないか尋ねると、表10にみられるように、全男性の7割、全女性の約9割がさまざまな問題点を指摘するからである。なお、同表の「その他」は、「郷里に医院が不足している」「郷里にいる妹の負担が大きいので、ホテルに一泊して妹の家に一泊する」「他県人と結婚したので」「結句年とってくると億劫になる。ついつい電話手紙ですませてしまう」である。

上のような郷里との交流は、自分（たち）1代限りなのか、次世代まで継承されるのか。このことについて尋ねたのが表11である。これによると、子や孫の代までの交流を展望する者は少数である。なお、「その他」は、「子供の代（に交流するかどうか）はわからないが、郷里の友達のお子様と私の子供が友達になっている」「子どもがいないのでわからない」などである。

さらに、自身の郷里以外に思い入れをもつ農山漁村があるかどうかを尋ねると、表12のようである。約半数が、自身の郷里以外の農山漁村にも格別の親しみを感じている。そのきっかけは、表13のように多様である。「その他」が多いが、「友人がいる」「自分の研究テーマ（歴史）との関係」「長男が勤めている」「（小説執筆のために）山歩き体験をしてみようということ で歩いた所」「セカンド・ハウスをもっている」「最初の勤務地」（以上、男性）、「家を建てた」「夫の転勤先で住んだ土地の人々への思い及び自然の美しさ・豊かさ」「母の里」「きまってしまうようになった釣り場」「落日が見たいとか、山が見たいとかという単純な発想」（以上、女性）である。

(5) 農山漁村振興への関心

都市在住高齢者は郷里の自治体などが行う町づくりや村おこしに関心をもっているのだろうか。この点についてみたのが表14である。これによると、多くの者が関心をもっており、「まったく」者は皆無である。また、関心をもつ者の割合は女性よりも男性で高い。

しかしながら、表15にみられるように郷里のまちづくりの事業内容については、知らない者の

方が多い。また、郷里の自治体が企画する農林水畜産物の直販やイベント、レジャープランに参加するかを問うと、表16のように、「内容によっては参加したり利用したい」という冷静な態度を示す者が多い¹¹⁾。

他方、都市に在住する高齢者たちは、郷里の自治体などが都市（民）との交流に力を注ぐことをどのように感じているのだろうか。このことをみたのが表17である。肯定する者が多く、参画したり力を貸すことに意欲を示す者が約4割いる。なお、「好ましくないので、やめてほしい」（1人）は、「それぞれに個性的に発展すれば自ずと交流が生まれると思う。あまり画一的な考え方はかえって進展をさまたげると思う。」という理由による。

さらに、郷里を離れた者の意見が郷里のまちづくりに生かされるべきかどうか。この問いに対しては、表18のように、「発言の機会を設けて、振興の参考にしてほしい」と「在住者が運営すべき。意見を聞いてもらう必要はない」とに回答が二分される。「その他」の内容は、「意見を言う機会を設けるという大きさなものではなく他出者の意見も参考にするとよい。」（男性）、「どちらとも言えない。」「ことがらによる。『純朴さを残せ』などは、地元の人に失礼だと思う。」「別にそこで生まれ育って外へ出た者とは限らず、広い気持ちで人々の意見を聞き参考にした方がよい。」「地方の町や村の人たちはあまりにも行政側に対しておとなしすぎる。どんどん意見を言って住みやすい方向にもっていけばいいのと思う。他出者が口出ししたくなる。居住者がそれでよいと思うなら（無関心も入れて）、それでいいのかもしれないが、長年都会暮らしをしていると、田舎の人のそういうところがとてもおかしいと思える。」（以上、女性）などである。

表14 郷里のまちづくりへの関心

	男	女	計
ある。	12	8	20
少しある。	4	9	13
ほとんどない。	3	11	14
まったくない。	0	0	0
〈計〉	〈19〉	〈28〉	〈47〉

（注）①択一回答、単位は人。

②東京都、京都市以外を郷里とする47人について。

表 15 まちづくりの内容

	男	女	計
よく知っている。	2	0	2
ある程度知っている。	4	13	17
ほとんど知らない。	12	12	24
知らない。	1	3	4
〈計〉	〈19〉	〈28〉	〈47〉

(注) 表 14 に同じ。

表 16 直販・イベント・施設の利用と参加

	男	女	計
すでに参加したり利用している。	2	3	5
ぜひ参加したり利用したい。	1	1	2
内容によっては参加したり利用したい。	13	16	29
あまり参加したり利用したくない。	2	4	6
まったく参加したり利用したくない。	1	1	2
関心がない。	0	0	0
その他。	0	3	3
〈計〉	〈19〉	〈28〉	〈47〉

(注) 表 14 に同じ。

表 17 郷里と都市(民)との交流

	男	女	計
好ましいので、都市民として参加したい。	2	7	9
好ましいので、架け橋として参加したい。	2	2	4
好ましいので、郷里民として参加したい。	3	1	4
好ましいことだが、かわりたくない。	7	5	12
どちらとも言えない。	4	6	10
好ましくないが、しかたないことだ。	0	0	0
好ましくないので、やめてほしい。	0	1	1
わからない。	1	2	3
〈計〉	〈19〉	〈24〉	〈43〉

(注) 表 14 に同じ。

表 18 他出者の意見

	男	女	計
発言の機会を設けて振興の参考にしてほしい。	8	8	16
在住者が運営すべき。聞いてもらう必要はない。	6	10	16
その他。	3	5	8
〈計〉	〈17〉	〈23〉	〈40〉

(注) 表 14 に同じ。

3. 調査結果からの示唆

(1) 農山漁村観の屈託

以上の諸表のそれぞれに、少数回答であっても注目し吟味しなければならないことが多くある。だが、ここでは第一次的な特徴把握にとどめる。すなわち、前節(2)～(5)を、各設問において多数を占める回答によりながらいてまとめると、

次のようである。

“長年東京近郊に住み続けている人々は、今、それぞれに自己啓発的な学習や地域創造的な活動に勤しんでいる。日々の暮らしの中には、農山漁村を彷彿させることも織り込まれている。そして、郷里と呼ぶことのできる地、求められればふんだんに思い出をあげることのできる地をそれぞれに持ち、交流も途絶えてはいない。その交流に一定程度満足しているが、一代かぎりのものと覚悟している。

彼らは、郷里がどのようにまちづくりされていくかについて無関心ではない。しかし、まちづくりの実態や構想をよく知っているわけではない。また、郷里が都市(民)と交流することについて歓迎する。だが、自身が参加するかと問われれば、積極と消極の二つに態度が分かれる。あるいは、郷里のまちづくりのあり方に関して他出した者(自身)が意見を言うことをめぐっても、「参考にしてほしい」と「口を差し挟むべきではない」とに、態度は二分される。

なお、長いライフコースを歩むあいだには、愛着や親しみを感じる第三の地が生まれることもある。”

この要約からもうかがわれるように、「ふるさと」としての農山漁村観には複雑さなしい屈託が伴う。表 3 のように郷里の原風景が回想されたり、表 4 のように父母兄弟に因むふるさと定義が受け入れられるかぎり、郷里はかけがえがない。その切実で親密な郷里の現在や将来について語るとき、ためらいがちになるのである¹²⁾。自由記述例をいくつかあげておこう。

“この年になると、いや自分の育ったふるさとは誰でも良かった悪かったは別として、嬉しいものです。大昔の事でも忘れることができませぬ。若い人と遠い先の事を考えるより過去の事を思うのが楽しみで、友人(クラス会)と会うと「あんな事があった」「あの山に登ってつづきがきれいだった」とか何でもいことを話します。毎日忙しい仕事をして居られる方は先々の日本経済など心配しておられるのでしょう。年をとった証拠です。よく布引山、経ヶ峰、長谷山、ふもとの村の冬景色、夕方になると煙がたなびく様子が目に浮び無性になつてくるものです。

今の生活では見られぬ生活、風景です。「ふるさと」の歌が出てまいります。難しい事は考

えぬ思い出丈がなつかしい「ふるさと」津です。” [A氏；女性]

“どうしても、よく遊び風景のよかった子供時代を中心に考えてしまいます。

子供の頃、水泳・魚釣・舟漕ぎなどで遊んだ所には広い海岸が作られ、自動車が疾走して危険な状態にあり、子供達の遊び場はなくなってしまいました。…繁栄とは裏腹に魅力を感じなくなっていました。年々観光地化が進められ…ですが、一方で折角の人情も営利心に押さえられて影をひそめ、…商店も減ってひっそりとし、子供の頃以上に差異が生じているように思われます。またその割には文化的な発展は感じられません。

何事も経済優先という名の開発が進められ、自然が破壊され、人間が振り回されていることは悲しむべき日本の現象ですが、しかし少なくとも「ふるさと」だけは昔のままであってほしかったと気ままな感懷を抱えています。

地元の人達はどう思っておられるか分かりませんが、このようなことから懐かしい故郷を思う気持ちはあるにしても、現実の姿に落胆を味わうことを恐れて、いざ訪れてみようという思いは積極的には湧いてまいりません。” [B氏；男性]

“…久しぶりに帰りました。住居の跡は「たんぼ」でした。つり橋ではなく車の通れる橋が出来ていました。…あの谷底まで美しかった流れが「ダム」になり、ガッカリしました。夏の日泳いだ…川の支流に温泉ができて宿泊しました。不便だった昔の生活が便利にそしてハイカラになって居ました。村の人達が皆これを喜んでおられるのかしら？と考えてしまいました。”

[C氏；女性]

このように、ふるさとの変貌に落胆したり疎外感を味わうなかで、農山漁村のあり方への感概や提案はいきおい抑制的になる。

ただし、農山漁村の現実に向き合う意見がないわけではない。

“「ふるさと」は確かに懐かしい。私にとっては三重大を卒業する迄過した場所であり、父母、弟妹、友人等との想出が走馬灯のように思出される。最近では毎年春のゴールデンウィークに1週間程家内と墓参りをかねて帰郷している。囲（ママ）りの田が一枚一枚と植えられて青くなっていくのをながめているのは楽しいものです。

反面憂うつな事は、長男であるが故に相続させられた家屋、畑、山林の処理と墓の移設です。2人の子供とその家族は東京を離れるつもりは無いので、私が存命中に処理しておかねば考えると頭が重くなる。

上記の如き個人的感傷は別として、農村の過疎化の問題は三重県だけでなく全国的に大きな問題だと思います。良い振興策はないでしょうか？”

[D氏；男性]

“「ふるさと」はここ数年来沿岸漁業がふるわなくて、最悪の状態です。町民の中ではますます貧富の差がでてきており、過去の遺産をくいつぶしています。しかし、最近の地方紙によると、観光客を呼ぶ催しが行なわれて、第1回はどうか成功したように見受けられます。具体的な行動は町にとっては初めての行動でした。この行動の道筋がますます発展してくれるようにと願っています。” [E氏；男性]

都市に住む高齢者たちは、充実した日々や地域の生活を送りつつも、こと郷里についてはどこかしら乾いた気持ちを持ちがちである。ふるさとへの想いと記憶が強い一方でその変容がそのままには受け入れ難かったり、住民自治の根本原則や“住み分け”の知恵への律儀さのあまりにふるさとへの気持ちの自然な発露をも「気ままな感懷」(B氏)や「個人的感傷」(D氏)と言い、どこかしら引いてしまう。あるいは、郷里の行く末を積極的・具体的に気遣っていても、ただ遠くから「願う」(E氏)ことしかできない。このような態度には、諦めや潔さとともに抑圧の様相を感じ受ける¹³⁾。

(2) 抑圧からの解放

そうだとすれば、次のことがらが検討されなければなるまい。

その一つは、抑圧のありようが一人一人においてどのように異なるのか。それぞれに抑圧からどのように解放されようとしているのか、という点である。たとえば表4において「意思疎通やネットワークができて、この地域」こそがふるさと言う人、「目的をもって生きている、今このとき」がふるさと言う人、「父母兄弟と過ごした所。今はなく、追憶だけ。」がふるさと言う人などでは、郷里への関心や姿勢、ひいては抑圧の様相にちがいがあのではないだろうか。あるいは、郷里との交流に障害が多い人とそうでない人

とでは抑圧の度合いにちがいはるのではないだろうか(表10)。こうした点を明らかにするためには調査個票や面接調査による詳細な検討を積み重ねることが必要であり、他稿を期したい。

検討を要する第二は、郷里からの疎外から解放されるための方策についてである。そのためにまず考えられるべきは、コミュニケーションの回路を用意することであろう。都市在住高齢者たちはたしかに人生のある段階で都市生活を選択した人々であるが、“村や町を棄てた人”であったり“都市に住むたんなる消費者”なのではない。村や町の現状と将来に大いに関心を持ち続けてくれている人々であるし、彼らのうちには都市と農村の交流を歓迎し「都市民として」「都市にいる郷里民として」あるいは「都市と郷里の架け橋として」提案や対話することを厭わない人々もいる(表17)。農山漁村に生き暮らす高齢者たちにおいても都市(民)への柔らかなまなざしが育ちつつあることを考え併せるならば(注2))、提案や対話のための柔らかな機会が積極的に創造されてよいのではないか¹⁴⁾。

このことは、都市在住高齢者から見れば、農山漁村の振興や変容の過程に立ち会い参画することでもある。そのような主体的参加の機会が用意されるとき、回想と現実の落差に落胆することも減るのではないだろうか。他方、郷里の町や村においても、農林漁業とそれを中心にした生活が備える経済・生態・文化の諸価値を再認識し、それらを総合的に実現するための方策発見に示唆を得るよい機会になるはずである¹⁵⁾。

[注]

- 1) 高度経済成長期に都市に移り住んだ人々が向老期を迎えつつある折り、高度成長とは何だったのかを総括するうえでも重要な主題である。
- 2) 三重県多気郡宮川村での聞き取り調査を、長くなるが紹介しておこう。

[a氏] 昭和1ヶタ生まれ。50年間山ばかりで仕事をしてきたが、現在は妻と級径30cmの材を市場へ持っていく程度だ。村の山は40～50年のものがほとんどで、木に粘りがある伐出期は今からだ。高齢化で伐出できなくなっているのがいちばん心配だ。素材業者に買ってもらおうにも、人出がないし林道が整っていない。

住居の周囲にある15枚の水田は、水が良いせいか、米がよく獲れた(最高10俵)。昭和60年代に村道の排土を盛って畑に変え、その畑にさまざまな農林産物

を試作している。a氏のいく枚かの畑はさながら実験圃だ。

アケビは昨年2万円ほど、コンニャクは2～3万円、フォレストピアに出荷した。今後が有望だ。サルナシも有望で、長野県まで見学に行った。トチの木も40～50本植えており、ホオノキ団子の材料にしている。需給が逼迫しているが、これを植えているのはa氏だけで、真似をする人はまだ現れない。シカがホオノキの幹を食べるのに困っているが、有望だ。村の人々と共に奨めたいのは、杉や檜ではなくクヌギを家の近くに植えることだ。米が作れない人でも椎茸なら作れ、その原木として使えるからだ。それに、何代も行くほどに次々と原木に使え、冬は落葉し夏は涼しい。

盆と正月に帰ってくる子供たちやその配偶者も、この田舎が好きだ。「息抜きできるように家屋は保存しておいてくれ」と言ってくれる。しかし周囲には空き家が多く、近隣の空き家の草を頼まれて刈っている。自分らがいなくなっても、この家や土地を守ってほしい。子供たちが、遠くから来て団地に暮らす人々のうちに親しい人をこしらえる。そうした人々に村に入って守ってもらいたいといけない。都市近郊では田地を切り売りして住宅を建設しているのだから、この近く(山の中)でそういうことがあってもよい。

[b氏] 昭和1ヶタ生まれ。夫は椎茸、自身は野菜作だ。役場が作ってくれた低農薬野菜栽培グループに参加していたが、出荷量が少ない、形状が不揃いなどの理由で、グループは解散した。引き続きEM(微生物)栽培グループとして無農薬栽培している。グループ員は8人で、平均年齢は64～65歳。若い人たちにも呼びかけるが、なかなか参加してもらえない。

作目は、サツマイモ、ネギ、ミズナ、ラディッシュ、ホウレンソウ、コマツナ、ショウガ、パレイショ、タマネギなどさまざまだ。病害虫予防液、肥料も自分で作る(肥料は購入肥料をもとにして)。配合のしかたが難しいが半値ででき、病気にも虫にも強くなる。農薬も化学肥料もないから、野菜が柔らかくて甘い。いろいろ気を使うが、農業新聞や気象状況を見て勉強したり工夫している。冷夏・暖冬などは逆手にとるようにしている。涼しく日照りが短いのであれば、それに合うものを植えるのだ。

この栽培をするようになったのは、農業の威力を知ったからだ。農業によって、虫は見ているうちにこける。農薬を怖く感じ、昔の百姓にもどったらどうかと思った。そんなときにEMの広告を見た。何だろうと思っていたところ、津市で開かれる大会に役場が誘ってくれた。さらに知りたくなって、自分で電話して学習した。そして、自分のものにしていった。

「形が不揃いの野菜も欲しい」と保母さんが言ってくれる。買いに来る近所の人々が、「まだあるなあ」と安心して楽しむ表情を見せてくれる。喜んでもらえていることが実感できる。もみじ館やフォレストピアに出すと、客が喜び口コミで評判が広がる。「経費がこれだけかかったからこれだけの価格を」ではなく、「ど

うぞ安く食べてください」なのだ。EM で儲けるとい
うより、これから育つ子に無農薬のものを食べてもら
いたいのだ。

〔c 氏〕 昭和1ヶタ生まれ。牟婁郡で教員をしていた。
昭和24年に、質素な村の11人家族に嫁いできた。山
林管理をしていた夫が亡くなった昭和43年に養鶏を
始めた。手ぎれいな仕事がないなかで、農協の指導を
受けた。飯南・大山田・度会などを見学して、これな
らできると確信して白鶏1500羽のゲージ飼育を始め
たのだ。

昭和46年頃には、休耕を求められ、におい公害が
気になりはじめていた。これを機に、全自動の傾斜を
融資で水田跡に建設し、5000羽規模にした。その頃
には、「こんなんでもいいのかなあ」と思うこともある
ほどに、好調だった。しかし、50年代の終わり頃には
円高不況のあおりを受けた（他町では自殺者もあっ
た）。「赤鶏を」という経済連の誘いもあって、また相
場とにらめっこしてやることに自信がなくなり面白くな
っていたこともあって、それまでの商社系インテグレ
ーションに見切りをつけた。

この頃からしっかりと経営分析するようになった。
設備投資後の人件費節約に心がけてのことだ。男の
人は何もかもドンブリ勘定にしがちなものだが、c氏は、
昼は体を動かし夜は計算をすることに努めた。その結
果、飼料要求率をはじめとする分析指標と経営効率
が大幅に向上した。そのことによって、県知事賞など
をも受けた。

養鶏を始めてから運転免許を取った。技術員、経済
連、獣医、肥料商、鶏商など、いろいろな人と接する
ことができた。「しんどいものはしんどいが、乗り越
えれば見返りはくる」、「ボケ防止に行けるところまで
行け」。こうしてやってきた養鶏を、最近体を壊した
ためにやめた。「精一杯やったので悔いがない」。これ
からが不安ではある。今は野菜を作ったりしているが、
養生したり、グループにでも入れてもらえればと思っ
ている。中学校で英語の聴講生にしてもらえないか、
などとも願っている。

東京にいる長男が、10年ほど前に、家族ぐるみで
保養に帰省した。その間に、孫には村内に友達ができ、
長男の妻もこちらで免許を取ったりPTA活動を通し
て友人ができた。家庭の運営について「あなたは内、
私は外（養鶏）」という取り決めをし、家のことも互
いの人柄も村の良さもわかってもらえた。そんな良い
2年間だった。そのおかげで、今でも村に来ると、孫
はフォレストピアで入浴したり川で泳いだり、宿題
（土場の研究など）をしたり、友人宅を泊り歩く。そ
して、「田舎へ来て教師をする」とまで言う。このよ
うに良い関係ができていくが、それぞれに子供がいる
息子や娘を犠牲にしようとは思わない。それぞれに自
由に生きればよいからだ。一人暮らしになって精一杯
やってきたので、悔いはない。〔拙稿「宮川村の農業の
かたち」（三重県高等教育機関連絡会議「中山間地域の
まちづくりの方向と可能性」、1999年）より。〕

こうした例に見られるように、長年農山村に暮らし

農林業に従事しながら、彼らには何かを求める探求者、
何かを成し遂げつつある人の風格がある。それととも
に、具体的な交流体験を通して養われた村外者への視
線は柔らかい。そして、近傍に定住してもらってよい、
安全でおいしいものを安く食べてほしいと願ったり、
村外の孫子たちに第二のふるさと観を芽生えさせるな
ど、柔らかさの綾は多様である。

- 3) 第二次世界大戦をどのように体験したか（被災、疎
開など）も、重要な要因であろう。
- 4) 調査結果の送付を希望する場合は筆者による訪
問インタビューを可とする場合には、現住所と氏名を
記入していただいた。
- 5) 正しくは、三重大学教育学部の前身である三重師範
学校（男子部、女子部）、三重大学三重師範学校、三
重青年師範学校（男子部、女子部）、三重大学三重師
範学校予科、養成科、三重大学学芸学部各卒業生であ
る。なお、1944年以前の卒業生を調査対象から外
したのは、アンケート記入労力の心身負担を慮っての
ことである。
- 6) 東京に居る地方出身者が東京をどう見るか、という
調査研究は散見される（たとえば、東京都都民生活局
『若い世代の東京観に関する世論調査』（1980年）、東
京都生活文化局『若い世代の生活意識に関する世論調
査』（1984年）など）。しかし、東京に居て郷里をど
う見るか、という調査研究は見出し難い。
- 7) 回答者の全員が狭義の農山漁村の出身（農林漁家の
子弟）というわけではない。しかし、たとえば給与生
活者として住宅地に居住していた場合でも、比較的近
くに農、林、漁業のいずれかが展開していたはずであ
る。そして、自然や仕事や伝統が織り成す場が展開し
ていたはずである。そのかぎりでは、都市近郊、商業地、
住宅地などが含まれていても支障はない。
- 8) 表4の選択肢のうちに、「友人・知人などと和める」
などの選択肢がないのは、反省すべき欠点である。
- 9) 表6の多くの選択肢は農山漁村での生産・生活行為
と似ているが、郷里ないし農山漁村を意識してなされ
ているとは言い切れない。
- 10) 表9の「その他」のうちには、「満足」「不満足」
という設問表現がなじまないことを指摘するものもあ
った。
- 11) その一方で、「百貨店で三重県物産展があると、よ
く出向く」という自由記述もあった。
- 12) 自由記述欄に、よく知られている「ふるさととは遠き
にありて思ふもの…」〔室生犀星「抒情小曲集」〕の詩
を記す者が多かった。
- 13) 都市に在住する高齢者は郷里に関して少なくとも
三重の抑圧態にある、ということである。すなわち、
日々を生きたり将来を構想するかが過去として
の郷里が抑圧される（第一の抑圧）。早く過ぎ去る
（ように感じる）高齢現在の時間感覚を補償するかの
ように、過去とくに幼児期が豊かなものとして回想さ
れる（第二の抑圧）。そして、ふるさとの現在に関与
することを憚ってしまった、関与しようとしてもそ
のための回路が不備である（第三の抑圧）。—— 本稿

で問題視しているのは、第三の抑圧に関してである。
なお、第二の抑圧に関しては、S. d. ボーヴォワール『老い』（朝吹三吉訳、人文書院、1996 年）、第 6 章を参照のこと。

- 14) 情報化の諸手段は、このようなことにこそ用いられるべきであろう。
- 15) 経済・生態・文化の諸価値とこれらの総合的な実現については、祖田修『農学原論』（岩波書店、2000 年）を参照のこと。

[追記]

本研究の主題は、村澤忠司教授を代表者とする三重県高等教育機関連絡会議の共同研究で芽生えた。調査票の

作成に先立ち、小谷みどり氏（働ライフデザイン研究所研究員）、宮池英夫氏（老人保健施設相生施設長）、渡辺渡氏（東京都杉並区老人クラブ連合会会長）からご教示を仰いだ。調査の実施に際しては、三重大学教育学部同窓会幹事の方々ならびに東京同窓会長田上昇氏のご厚意を頂いた。そして、多くの卒業生の方々から懇切なご回答を頂戴し、幾人かの方からは調査票の拙さについてご叱正を賜わった。— 上記の方々に、厚くお礼を申し上げます。

なお、本研究は平成 11 年度文部省科学研究費補助金（基盤研究 B-（1）；都市・農村の交流と結合；研究代表者 祖田修教授）に負っている。